マンションレゲラ

ねこぢょう

［登場人物］

君塚（きみづか） 陽一（よういち）（５０）１０６号室住人

君塚（きみづか） 莉子（りこ）（２６）１０６号室住人

日比野（ひびの） 麻紀（まき）（４６）１０７号室住人

菅原（すがわら） 結那（ゆな）（２２）１０７号室住人

吉井（よしい） 敏郎（としろう）（４４）ペット探偵

富田（とみた） あいか（？）占い師

大槻（おおつき） 蒼（あおい）（２７）莉子のカレシ

序幕

舞台上は、三辺を壁に囲まれていて、その中心に長方形の四人掛けのテーブルと椅子が四つある。
上手と下手にそれぞれ解放の出入り口がある。
テーブルの椅子は、上下の端に一個ずつと前から観て正面に二つ置かれている、どこかのリビングというふうである。
二つの部屋を同じ場所で表す二極的な設定なので、絵画を掲示して、場面ごとにひっくりかえしても良いし、時計を設置して、場面ごとに交換しても良い。
上手奥の壁に、液晶画面が客席に見えない角度に、インターフォンの受話器が設置されている。
どこか無機質な、生活感のない感じである。
突然、ふわりと舞台上に明かりが入る。

ナレータ　人は、ふとこう思います。ああ私の日常は、毎日毎日判でおしたような同じ事の繰り返しだ。こんな事をしていて、私が生きている意味はあるのだろうか。もっと、世の為人の為。ドラマチックでドキドキするような。そんな時間を過ごさないといけないのではないだろうか。でも、足を止めて、ちょっと考えてみてください。あなたが何気なく過ごした今日は、昨日とは違う今日じゃなかったでしょうか？　朝起きて今日はいつもよりも早く窓を開けませんでしたか？　満員電車で同じ車内に、いつもと違う人が乗っていませんでしたか？　会社の隣のデスクの同僚は、いつもより機嫌がよかったんじゃないですか？　そんな少しずつ違っている毎日を過ごすって事は、百日生きてたら百通りの一日を生きたって事になりますよね？　そう考えると、二十歳になった人は、七千通り以上。四十歳だと一万四選通り。六十歳だと二万一千通り。八十歳だと約三万通り！
どうです？　そう考えると、生きるって、実はすごい事なんじゃないかと思いませんか？

音楽のボリュームがアップして、明かりがゆっくりと暗くなっていく。

第一幕

休日の午前、君塚陽一が、下手側前の椅子に座って客席を見ている。
ジーっと見ている。なんだか客が不安になるくらい見ている。
陽一、つまらなそうにリモコンを客席に向けてボタンを押す。

陽一　　つまんないなぁ、テレビ。

下手入り口から、君塚莉子が入ってくる。

莉子　　お父さん準備できた？　服とか。
陽一　　これでいいだろ？
莉子　　ちょっとちょっと、娘のカレシが挨拶に来るんだから、スーツとは言わないけど、せめてジャケットくらいは羽織ってヨ。
陽一　　そんな、ただ挨拶に来るだけなんだろ？
莉子　　まぁそりゃあただの、別に結婚の挨拶とかじゃなくて、お付き合いさせてもらってますって挨拶なだけなんだけどさ、それにしても娘としては変な格好の父親じゃあ恥ずかしいじゃないの。
陽一　　エー？　これでいいだろう？
莉子　　ダメだってば。ジャケット。着てきて。
陽一　　わかったよ。

陽一、下手口から出ていく。
莉子、ちょっと嬉しそうに、家の中が見られて恥ずかしいものが無いか指差し確認している。

莉子　おとうさ―ん。
陽一　（声）なに―？
莉子　蒼君、緊張してると思うから、あんまり怖がらせないでね。お父さん、ムスッとしてると怖いから。
陽一　（声）はいよ―。

陽一、ジャケットを羽織って戻ってくる。

陽一　どう？　これで。
莉子　いいんじゃない。
陽一　でもさぁ、真剣にお付き合いさせてもらってます。ってわざわざ父親に挨拶なんか来なくてもいいんだけどなぁ。
莉子　だからそこが真面目なのよ蒼君は。お父さんが男手一つで育てたから、娘が変な男と付き合ってるんじゃないか心配しているだろうって気ぃ遣ってくれてるんだから。
陽一　別にそんな心配してないけどな。ひとり親ながら、しっかりした立派な娘に育ちましたし。
莉子　お父さんのおかげ、じゃなくて、おばあちゃんのおかげだけどね。
陽一　そんなことないだろう。お父さんだっていろいろ育児したぞ。
莉子　ほとんどおばあちゃんだったじゃない。お父さんは仕事仕事って言って、運動会とかの大きい行事しか来てくれなかったくせに。
陽一　ほら、小学校の卒業式はお父さん行ったろ？　あれって休みとるのすごい大変だったけど行ったんだぞ。
莉子　あぁあぁ。自分が卒業するんでもないのに一番泣いちゃってて、すんごい恥ずかしかった奴ね。
陽一　（自分で言い出しといてこっ恥ずかしくなり）そうだったっけか・・・（話題を変えて）そう言えばさ、キッチンに、ラリックのグラス出てたけど、その蒼君に、あのグラス使うの？
莉子　そうよ。
陽一　えー！　あれって結構高いんだぞ。
莉子　ダメだって。一応、お客さんなんだから。

陽一　そんな、初めて来るカレシなんて、ダイソーのコップで十分なんだよ。俺なんてね、昔、お母さんの家に初めて挨拶に行った時、紙コップだったんだぞ紙コップ。わかるか？　百十円ですらなかったんだぞ。

莉子　そんなね、自分が紙コップだから娘のカレシも安いのでいいんだ、とかって器が小さいから、お母さん嫌になって別れちゃったんじゃないの？

陽一　うわ、傷ついた。そんなストレートに言って。オブラートとか全然なくて。お父さん今傷ついた。

莉子　あー、めんどくさい。

陽一　あ、今めんどくさいって言った。これから娘のカレシと会うのにいろいろと複雑な気持ちのお父さんに・・・・

莉子　はいはい分かった分かった。ごめんなさい、言い過ぎました。

陽一　そんな言い方で謝られてもなぁ。

莉子　(言いたいことをグッとガマンして、ちゃんと頭を下げて)言い過ぎました。ごめんなさい。

陽一　(受けて)はい。

莉子　じゃあホント頼むね。蒼君、緊張しいだから。

陽一　分かったよ。

莉子　あと、ビールはダメ。禁止だからね。

陽一　えー？　休みだからいいじゃんか。男同志はさ、飲んで話すと親しくなるとかあるんだよ。

莉子　だからそういう席じゃないの。あくまでご挨拶なんだから。適当にお茶飲んで、適当にお喋りして、じゃあそろそろって終わって、また今度って言って帰るの。

陽一　つまんないなぁ。

莉子　お父さんを楽しませる席じゃないんだから。

陽一　はいはい。

莉子　お婆ちゃんがいれば安心だったんだけどなぁ。こういうお客さん招くのとか、お婆ちゃんうまかったから。

陽一　しょうがないだろう。もういないんだから。

莉子　やっぱりさ、こういう時って女の人がいてほしいわけよ。男親よりも。お父さんもさ、いい人とかいないの？

陽一　いい人？
莉子　だーかーら、付き合ってる女の人とか、そうじゃなかったら、いいなと思ってる女の人とか。
陽一　いるよ。
莉子　いるの？
陽一　長澤まさみ。美人だよなぁー。あれはいいな～と思うよ。
莉子　そういうのじゃなくて、リアルで。
陽一　あー、そっか。・・・・（考えて）いないな。
莉子　（うなづいて）ですよね。だから・・・（言おうとして言うとケンカになると気づき）まぁいいわ。
陽一　何いま？　何か言おうとしてなかった？
莉子　なんでもないから。
陽一　そう言えばさ、蒼君、昼飯はどうすんの？
莉子　ああ、せっかく来るんだから、ピザでも取ろうかなって思って。その方がさ、どのトッピングにするとかって盛り上がりそうじゃない？
陽一　ピザ取るの？　わざわざ？
莉子　お客さんなんだから当たり前じゃない。じゃあ、お昼も出さないで、蒼君、お腹空いたらどうすんの？
陽一　コンビニ行って、弁当でも買えばいいじゃないか。
莉子　バカ。どこの世界で、家に来たお客さんが、［ちょっと昼買ってきます］って外に出るの。それはね、業者よ業者。エアコン修理とかで来て、思ったより時間かかっちゃって昼時間をまたいだ業者よ。
陽一　そうですか。じゃあピザね。（見まわして）うん？　吉二郎どこ行ったかな？
莉子　さあ。どっかで寝てるんじゃないの。
陽一　アイツも蒼君に紹介しないとな。家族の一員なんだから。
莉子　まぁた寝てるの起こす。怒られるよ。
陽一　怒っても、アイツはオレの事が好きなんだよ。

陽一、下手に消える。

莉子　もうすぐ来ちゃうよ。

陽一　（声）はいはーい。

莉子　（客席側の壁の時計をみる）もうすぐね。ハー、なんか緊張する。

陽一　（走って戻ってきて）おい、吉二郎いないぞ！

莉子　え？　お婆ちゃんの部屋にいるでしょ？

陽一　いないんだ。それで、窓が開いてた。お婆ちゃんの部屋。

莉子　あ。

陽一　なに？

莉子　さっき、空気入れ変えて、そのままだったかも。

陽一　え？　じゃあ、吉二郎・・・・

莉子　ひょっとしたら・・・出てっちゃったかも！

陽一　（下手に消える）

チャイムが鳴る。

莉子　（インターフォンを出て）あ、蒼君。ハーイちょっと待ってね。（上手に行く）

莉子、ケーキの箱を持った大槻蒼を従えて戻ってくる。

蒼　　え？　猫がいないの？

莉子　うん。
蒼　ひょっとして、俺が来たから？
莉子　そういうわけじゃないのよ。まだいないかどうかもわかんないし、案外どっかベッドのすみっこで寝てるとかよくあるし。
陽一　（戻ってきて）莉子、吉二郎どこにもいないぞ。
莉子　本当？　よく探した？
陽一　ああ。いそうな所全部見たけどいない。あー、絶対家出したなコレ。
莉子　（独り言のように）こんな時に・・・
陽一　俺ちょっと、吉二郎探しに行ってくるから。まだ近くにいるかもしれない。
莉子　あ、お父さん。（紹介する）こちら、大槻蒼君。
蒼　どうも、はじめまして。大槻蒼です。
陽一　（無理に笑顔作って）どうも。莉子のお父さんです。（一礼）じゃあ莉子、お父さん行くから。
莉子　え？　行くの？
陽一　だって、早くいかないと、吉次郎、どんどん遠くに行っちゃうかもしれないし、もし車に轢かれでもしたら・・・
莉子　ちょっと落ち着いてよお父さん。吉二郎の好きなおやつとか持って行った方がいいよ。
陽一　そうだな。じゃあ・・・チーズと、煮干しか。
蒼　あの、お父さん。これ、つまらないものですけど。（箱を差し出す）
陽一　ああ、ありがとう。これ、チーズ？　煮干し？
蒼　あ、ケーキです。
陽一　吉二郎はケーキなんか食べないんだよ！（睨んで、テーブルに置く）じゃあ、莉子、後は適当にやっといて。
（上手に走って出て行ってしまう）
莉子　あ、お父さん、おやつ持って行けって言ったのに。もーう。（下手に消える）
蒼　（急に一人ぼっちにされて）莉子ちゃん？　莉子ちゃん？
莉子　（おやつの入ったビニール袋を持って）ごめんね、蒼君。じゃあちょっと、待ってて。すぐ帰って来るから。（上手に走っていく）

蒼　（見まわして）ゲ？　（どうしようか逡巡して）エ？・・・エエ～？・・・・莉子ちゃ～～～ん？（上手に追いかける）

暗転

第二幕

薄い暗転の中、菅原結那が、観葉植物の鉢を抱えて入ってきて、下手前に置いて、自分は、上手前の椅子に座る。
明るくなると、結那は両手を祈るように組んで、客席側、つまり真正面を見て集中している。どうやらテレビを見ているようで、やや微笑みながら見入っている。
前幕と同じ日時である。
下手から、パジャマ姿の日比野麻紀が眠そうに入ってきて、下手側のイスに座る。

麻紀　おはよ。
結那　（目線は正面から離さずに）うん。おはよう。
麻紀　（正面を見て）あんた、またコレ見てんの？好きね～。
結那　うん。
麻紀　・・・なんて言うんだっけ？　コレ。
結那　「スペース忍者　しのびんの日常」
麻紀　そうか。しのびんか。
結那　そう。

麻紀もしばらく画面を見ている。

結那　昨日、結構遅くまでやってたの？
麻紀　ああ、そうね。結構頑張ったけど、あんまり進まなかった。
結那　大変よね。小説家も。
麻紀　ありがと。なんかさぁ～、主人公とヒロインが、だんだん恋愛関係になってくってところがうまく書けなくて、困ってんのよね。
結那　なんてタイトルだっけ？
麻紀　「天ぷらそばと私」
結那　ああ、そっかそっか。確か、そば屋の三代目と、その店にパートで働いているシングルマザーの話だよね？
麻紀　なんか、潰れそうな店をなんとか立て直しながら、二人が恋に落ちるっていう・・・
　　そう。そろそろ早紀が、あぁ早紀ってそのシングルマザーなんだけど、早紀が店の若旦那に恋心を感じなきゃいけないって所で止まっちゃってさぁ。
結那　でもそれってさ、恋する気持ちってのを忘れちゃってるだけなんじゃないの？
麻紀　え？　誰が？
結那　おばさんが。
麻紀　そ、そんなことないわよ。私だってさ、いろいろあんのよ。
結那　そう？　私が一緒に住みだしてから、なんかそういう男の人からのお誘いで出かける感じないじゃん。
麻紀　いやいやいや、あんたが来る前はね、結構そういう誘いとかあったわよ。
結那　ふーん・・・じゃあ、何年してない？
麻紀　なにが？
結那　（意味ありげに麻紀を見る）
麻紀　な、なんなのそれ、全然関係ないじゃない。
結那　あのさおばさん、自分が恋しなきゃ、恋愛小説なんて書けないって。

麻紀　なにわかったようなこと言ってんの。人の事よりさ、あんたはどうなの？こっち来て半年、何にもしてないで、朝からアニメと漫画とゲームしかやってないじゃないの。就職しろとは言わないけどさ、せめてバイトくらい探しなさいよ。こんなんじゃ、ただのニートじゃない。

結那　ニートってさ、自分の家の部屋にこもってる事でしょう？　私は、埼玉からこっちに出て来たんだから、ニートじゃないじゃない。

麻紀　はいはい。どうせさ、横浜におばさんがいる。横浜ってなんかおしゃれでいいかも。うるさいお母さんもいないし。って浅―い考えでこっちに来たんでしょう？

結那　ちょっと待って！（テレビの画面に集中する）・・・

麻紀　・・・これ、ＤＶＤよね？　何回も同じもの観て、飽きないのかさ？

結那　いいじゃん。好きなんだから。

麻紀　ふーん・・・あのさ、来週の土曜日、午後に占い師の先生がここに来るからね。

結那　占い師？　何しに来るの？

麻紀　占い師だから占いよ。

結那　え？　急に占い師家に呼ぶとかってどうしたの？　ひょっとして、結構マジだった？　恋愛運？　結婚運？

麻紀　違うわよ。今書いてる小説で、占い師を出すから、いろいろ取材したいですってお願いしたら、じゃあそちらにお伺いして出張占いって形でって言われたの。だから、仕事よ仕事

結那　仕事？　でもチャンスだから占ってもらえばいいじゃん。

麻紀　まぁ占ってはもらうけどさ。占い師さん、［富田あいか］って言って、十年くらい前に、水着みたいなの着て［セクシー占い］ってやってて、結構テレビで売れてた人なんだけど、知ってる？

結那　（首を振る）

麻紀　そっか。あの頃はあんたまだ小さかったからね。まぁ、取材費ってことで領収書出せば、出版社で払ってくれるって担当さんが言ってくれたからさ。

結那　ふーん・・・・でさ、

麻紀　ん？

結那　話し変わるけど（観葉植物を指さして）あれ、すんごい邪魔なんだけど。
麻紀　あー、あれ・・・
結那　おばさん、ああいうものに興味ないんでしょ？
麻紀　うん。興味ない。
結那　じゃあ捨てちゃえば？
麻紀　ダメなのよ。剣持先生との雑誌の対談で先生の仕事場にお邪魔した時に、いいですね～。ってお世辞で褒めたら、そう？じゃああなたにあげるわよって言われちゃってさ。断れる？　断れないでしょう？
結那　黙って捨てちゃえばいいじゃん？
麻紀　捨てちゃって、それでもし剣持先生うちに来たらどうすんの？　あらあの鉢はどうしたのって聞かれて、ちょっと散歩行ってますとか言えないじゃない。犬や猫じゃないんだから。
結那　あ。
麻紀　どうしたの？
結那　・・・・・猫だ。
麻紀　猫？
結那　うん。シマシマで目つきの悪い・・・不細工なの。（客席を指さして）今、そこにいる。ホラホラ。
麻紀　（じっと見て）・・・あ、本当だ。猫だ。
溶暗。

第三幕

結那、鉢を抱えて退場。麻紀、退場。
陽一、上手前に座る。吉井敏郎、下手前に座る。
莉子、上手奥に座る。蒼、下手奥に座る。前幕から二日後の午後である。

吉井　（スマホにメモしながら）・・・ていう事は、吉二郎ちゃんがいなくなったのは、一昨日の昼前。ですね。
陽一　はい。
吉井　どこから出て行ったんですか？
莉子　奥にある、お婆ちゃんの部屋です。私が、窓を開けっぱなしにしたから。
吉井　そうですか。後でその部屋も見せてください。エート・・・じゃあ、何歳くらいで？
陽一　二歳半です。
吉井　体重は？
莉子　たしか、４キロくらいだったと思います。
吉井　なるほど。性格的には、どんな猫ちゃんですか？　気性が荒いとか、甘えん坊とか、人見知り激しいとか。
陽一　どっちかって言うと、のんびり屋です。マイペースという感じで。
吉井　あー・・はいはい。
莉子　そんな事が重要なんですか？
吉井　猫ちゃんの性格によって、いろいろ変わりますからね。行動範囲とか、行先とかが。それで、吉二郎ちゃんは、窓からどんなものを見てました？
莉子　（客席側を指さして）そこの窓から、外を見るのが好きでした。
吉井　（客席を見て）なるほど。ちょっと失礼します。（立ち上がり、窓の外の景色を見る）吉二郎ちゃんが何を見ていたのか知りたいんですよ。（指さして）この箱庭は、お隣と繋がっているんですか？

陽一　そうです。柵で囲われてるだけで。
吉井　じゃあ、お隣の庭を通った可能性もありますね・・・ちなみにお隣さんは、どんな方ですか？
陽一　女性の方が一人暮らしされてるみたいですけど。四十代くらいかなぁ。顔があった時に挨拶するくらいです。
吉井　なるほど・・・
莉子　吉二郎、どのくらいで見つかります？
吉井　それは、一概にいついつまで、とも言えないですね。すぐに見つかるかもしれないし、一年や二年かかるかもしれません。
陽一　一年！
吉井　あくまで、例えばですから。意外と早いと、三日とか一週間で見つかるケースも多いんです。
陽一　そうですか。吉井さん、それで話しの途中ですが、ちょっとすみません。（蒼に）君は、なんでここにいるんだ？
蒼　　え――？
吉井　あれ？　息子さんじゃないんですか？
陽一　違います。全然、赤の赤の赤の他人です。
莉子　お父さん、だから言ったでしょう。ペット探偵さんがいるって事調べてくれたのは蒼君なんだから、私が言って来てもらったの。
陽一　うん。それは分かってる分かってる。ただね、家族同然みたいな感じでいるのもさ、ちょっと違うんじゃないのかなーと思ってさ。
莉子　私が呼んだんだからいいでしょ。（吉井に）すみません吉井さん。こっちの話で。
吉井　いえ、大丈夫です。じゃあ、とりあえずは、「この猫探してます」というチラシを作って、近所を捜索しながらそのチラシをいろんな家のポストに入れていきますので。
陽一　チラシは何枚ぐらい必要です？
吉井　とりあえず・・・五百枚ですね。目撃情報がたくさん集まった方が、見つかるのも早いですから。
蒼　　そのチラシ、僕たちも配っていいんですか？
吉井　もちろんです。

陽一　だからなんで君がしゃしゃり出るの？
莉子　心配して協力してくれるって言ってるんだから、悪い事してないじゃない。
陽一　あのね、関係ないんだから。無関係なの。こっちとそっちは、別！
莉子　もー！（話題を変えようと）でも、ペット探偵なんて珍しいですね。蒼君に教えてもらうまで、そんな職業があるなんて全然知らなくて。
吉井　そうですか。最近は、ペットを飼ってらっしゃるおうちが多くなって・・・ほら、コロナとかで職場に行かずに家でリモートで仕事やる方が増えたじゃないですか。そしたら今度は一週間誰とも会ってないとかって人も増えてきちゃって、癒しの為にペット飼う方が増えたんですよ。やっぱり、人間って、生身でコミュニケーションを取りたい生き物なんじゃないでしょうかね。
陽一　なるほど・・・
吉井　そうしたら、今度はあまりにも飼い主と一緒にいる時間が長いので、ストレスで体調が悪くなってしまうワンちゃんや猫ちゃんがたくさん出てきちゃったりしてるんです。
莉子　お父さんみたいね。
陽一　なんでだよ？
莉子　だって寂しいからって、吉二郎吉二郎って追いかけてばっかりいるじゃない。吉二郎も、あんまりにもうるさいから嫌になって逃げだしたのかもよ。
陽一　何言ってんだよ。元はと言えば、莉子が窓を開けっぱなしにしてたのが原因だろう？　全く、探偵さんの費用も出してほしいくらいだよ。
莉子　ウワぁ、ケチ臭！　だからモテないんだよ。
蒼　ハハハハ。
陽一　何で笑うんだ、他人が。
蒼　・・・すみません。
吉井　それで、吉二郎ちゃんの写真とかありましたら、私に送ってもらえませんか？
陽一　あ、写真ですか。（スマホをいじってどの写真にしようか選び始める）ホラ吉井さん、これなんかどうです？　これねぇ、本当に

吉井　たまたまなんですけど、吉二郎のカメラ目線を撮れたんですよ。かわいいでしょ？
陽一　あー、いい写真ですねぇ。
吉井　どれにしようかなぁ・・・・迷うなぁ・・・・
陽一　(長くなりそうなので切り上げようと)あ、じゃあ、三枚くらい決まったら、私に送ってください。
吉井　ああ、はい。
陽一　それでですね、出来ればお隣さんとかに、吉二郎ちゃんのことを目撃していないか話を聞けませんかね？
吉井　お隣さんにですか？
陽一　ええ。この箱庭を行ったとして、結構お隣くらいで目撃されてるかもしれないので。それで、吉二郎ちゃんがどっちの方向に行ったか分かったら、捜索範囲を絞れますし。
莉子　そう言えばさ、お隣さんって、若い女の子がいる時あるよね？
陽一　女の子？　(記憶をたどって)うーん・・・見た事無いなぁ。娘さん？
莉子　知らない知らない。お隣さんの玄関のトコで会って、ちょっと頭下げて挨拶しただけ。
陽一　娘さんって事は・・・結婚してんのかなぁ？
莉子　あら、気になるの？
陽一　そういうんじゃないけどさ。まぁそうなのかっていうだけで。
吉井　話し、聞けそうですか？
陽一　分かりました。じゃあ、お隣さんは莉子行ってきてくれよ。
莉子　私が行くの？
陽一　女の人しか住んでない所に、こんなおっさんがいきなり来たら、なんか怪しいだろ？
莉子　ああ・・・まぁ、そうか。
吉井　あと、すみません。おばあさんのお部屋っていうのを見せてもらいたいんですよ。どこから出てったのかも知りたいので。
陽一　ああ、そうですか。分かりました。
莉子　じゃあ、こっちです。どうぞ。

莉子、吉井を先導して下手に行く。
吉井に付いて蒼も行く。

陽一　　なんで君も行くんだよ。
蒼　　はあ・・・すみません。

四人、順繰りに下手に去っていく。

溶暗

第四幕

結那、観葉植物を持って出てきてそれを下手に置き、上手奥の椅子に座る。
麻紀、出てきて、上手前の椅子に座る。富田あいか、出てきて、下手前の椅子に座る。
麻紀、右手の平をあいかに向けて見せると、明るくなる。前幕の五日後である。

あいか　　あー・・・はいはい・・・・ア。
麻紀　　先生、何が[ア]なんですか？
あいか　　お待ちください。エート・・・・(自分のタロットカードを手際良く切って、それを所定位置に置いていく。全て淡々と行われる。
前の二人はあいかの一挙手一投足に注目する)では、日比野麻紀さん。この中から好きなカードを一枚選んでください。

麻紀　はい。（好きなカードを指して）これです。
あいか　（それを見て）やっぱり。
麻紀　何がやっぱりなんですか？
あいか　先ず・・・ですね。（カードをめくって）アー・・・三十・・・六歳くらいから、すごい仕事運があがってますね。
麻紀　はい！その頃、公募に出した小説が確か優秀賞くらいをもらって、それで出版社から連絡が着て、単行本デビューしたんです。
結那　当たってんの？　スゴ！
あいか　じゃあ、もう一枚、好きなカードを選んでください。
麻紀　はい。（どれにしようか、迷いながら）じゃあ、これで。
あいか　（カード見て）あー・・・なんか・・・あれですか？　最近、なにか面倒なものを任されたというか、受け取ったみたいな事がありました？
結那　もしかしたら・・・あれの事じゃない？（観葉植物を指さす）
麻紀　あ、あの鉢です。大先輩の先生から譲ってもらったんですけど、正直全然欲しかったってわけじゃないんです。
あいか　あ～、あれですか・・・あれがこの家に来たから、良い運気の流れが麻紀さんに来てるんですよ。
麻紀　そうなんですか？　邪魔でしょうがなかったんですけど。
あいか　邪魔でも捨てたりしてはいけません。そうですね。日比野さんの運勢は淀んだどぶ川みたいな運気の流れだったんですが、あれがきて、涼し気な小川みたいな流れになっています。
麻紀　・・・どぶ川って。
結那　じゃあ、恋愛とか出会いとかって運気も上がっているんですか？
麻紀　結那！ちょっと！
あいか　ハイちょっとお待ちくださいね。（カードをめくり）あ～・・・・こうなるのか・・・・
麻紀　先生、さっきから、あ～。とか、やっぱり。とか、思わせぶりな感じ強めなんですけど、いつもそうなんですか？
あいか　（それには答えず）ペンギン。
麻紀　はい？

あいか　ペンギンがいますね。
麻紀　ペンギン・・・それって、いいんですか？　悪いんですか？
あいか　いいんです。ペンギンは、一個の卵を夫婦で協力して育てます。オスが温めている間にメスはエサを取りに行きます。
麻紀　あ、でも先生、私、年齢的にも出産とかはもうちょっと・・・
あいか　なにも卵を温めるのだけが共同作業ではありません。そうやってペンギンのように、お互いを助け合えるような、良いパートナーに恵まれる可能性があるってことなんです。
結那　それっていつなんですか？　そういうパートナーの人と会えるのって？
麻紀　もーう、アンタは口出さないの。いい？　これは、小説に書くための取材でもあるんだから。（スマホが鳴る）あ、ちょっとすみません。（出て）はい。あ、どうもお世話になっています。エーット・・・三十八ページの？・・・・五行目ですか？　じゃあ、ちょっとパソコンある部屋に移りますね。（あいかに）先生、すみません。ちょっと失礼します。（また電話に）はいハイすみません。ちょっと待ってください今行きますから。（下手に入る）
結那　先生・・・・私も占ってくれませんか？
あいか　ああ、別に構いませんけど。そのぶん料金はかかりますが。
結那　あ、なんか、うちがお金出すわけじゃないみたいだから、大丈夫です。
あいか　（何が大丈夫かよくわからないけど。の頷きをして）じゃあ、右の手の平を見せてください。
結那　（右手の平を出して）はい。
あいか　（それをじっくり見て）あー・・・（今度はタロットカードを切って配置して）では、次はこの中から好きな一枚を選んでください。
結那　はい。じゃあ・・・これ。（指さす）
あいか　（そのカードを見ながら）・・・そうなるのね。
結那　え～なになに？　怖いんだけど。
あいか　じゃあ、結那さん。ここ最近の四年くらいは、運勢が沈滞していますね。何をやってもうまくいかないような事が続いていたんじゃないでしょうか？
結那　・・・・そうです。高校中退して、バイトやったりしたけどなんか長続きしなくって。

あいか　今ちょっとヤケになってません？　「どうせ私なんかダメな人間なんだ」とかって感じで考えちゃってて。
結那　（驚いてあいかをじっと見る）
あいか　・・・・図星みたいね。
結那　なんで分かるの？
あいか　（にっこり微笑んで、もう一枚めくる）――そうよね。やっぱりそうなるわよね。
結那　（恐る恐る）・・・どうなの？
あいか　未来の話だけどね、結那さん。あなたはずっとこのままじゃないから。今は底なだけで、ここからはもう良くなってくだけなので。
結那　じゃあ、普通に働けたりするんですか？
あいか　普通って言い方も違うけど・・・あのね、そういう、「私はダメで独りぼっちなんだ」って気づけたのも、あなたの貴重な経験なの。例えば、周りの誰かが「独りぼっちだしうまくいかないし」って感じているとするでしょう？　誰も気づいてあげられない。でも、あなたは、それに気付いて助けたりしてあげられるのよ。だから「この辛い時期は、これはこれで必要だったんだ」って思える時がきっとくるわ。
結那　ハー・・・そうなんですか・・・・
あいか　（微笑んで）あんまりピンときてないみたいね。
結那　・・・ですね。よくわかんない。なんか・・・「三か月後には彼氏が出来ます」みたいに、はっきりした事だと素直に喜べるんだけど。
あいか　あんまりはっきりしたものって、つまらなくない？　深みが無くて。
結那　そうなの・・・かなぁ・・・
あいか　フフフ。ごめんなさいね。まだちょっと難しかったわよね。

麻紀、下手からノートとペンを手に持って入ってくる。

麻紀　先生すみませ～ん。（座ろうとして何かが変わってるのに気づいて）アラ？　結那、アンタ占ってもらってたの？

結那　うん。
麻紀　マいいわ。(あいかに)じゃあ先生。占いはこのへんにしておいて、ちょっとお話をお聞きしたいんですけど、よろしいでしょうか？
あいか　もちろん、構いませんよ。
麻紀　ありがとうございます。(ノートを開いて)それじゃああの、先ずですね、いつぐらいから占い師という職業で・・・・

チャイムが鳴る。

麻紀　ちょっとすみません。(インターフォンに出て)はいもしもし?・・・・はあ・・・お隣の・・・いえいえいつもお世話になっております。・・・・ええ・・・・猫?・・・・そうですか。あの、少しおまちください。行きますので(切る)
結那　誰？
麻紀　なんかよく分からないんだけど、お隣の君塚さんの娘さんが、猫がいなくなったので話を聞きたいだとかなんとか・・・
(あいかに)先生ちょっとすみません。
あいか　大丈夫です。

麻紀、上手に行く。

あいか　お隣さんとは、親しいんですか？
結那　私が来てから、ピンポン押して来た事ないです。あ、でも一回、娘みたいな人には会ったことあったな。「どうも」って挨拶しただけだけど。
あいか　ふーん・・・

莉子(声)　エー！　占い師さん？　私、占いだいっ好きなんですよ。

結那　声デカ。
あいか　ふふふ。
莉子(声)　冨田あいか？　知ってます～！　超有名ですよね！　えー私も占ってほしいなー。
あいか　その、あなたが会った娘さんって人？
結那　たぶん・・・そうだと思います。
莉子(声)　いいですか？すみません。じゃあお邪魔しまーす(麻紀に先導されて一緒に上手から入ってきて)すみません。なんか、占い師の先生が来てるって聞いて、私占いすっごい大好きなんで、お邪魔させてもらいました。
(結那に)あ、どうも。隣の部屋の君塚の、莉子と言います。よろしくお願いします。(頭を下げる)
結那　どうも。姪の結那です(ぺこりと頭を下げる)
麻紀　で、こちらが、占い師の、富田あいか先生。
莉子　どうも初めまして。君塚です。よろしくお願いします。(深々と頭を下げる)
あいか　富田です。よろしくお願いします。
莉子　(自然に図々しく空いた椅子に座って)それじゃすみません。さっそくですけど、ちょっと見てもらっていいですか？
あいか　はい。それじゃあ、右手の平をこちらに向けてください。
莉子　はい。(右手を出す)・・・(ここでやっと麻紀のイスをとった事に気づいて)やだすみません。イス取っちゃってましたね。
麻紀　イエいいんですよ。大丈夫ですので。
莉子　イヤでも本当に。(右手を下げて椅子を譲ろうとする)
あいか　(少し冷たく)見えない。
莉子　あ、ハイすみません。(また座って右手を見せる)
麻紀　(静かに下手奥の椅子に座る)
あいか　はいもういいです。(タロットカードを切っておいて)では次に、この中から好きな一枚を選んでみてください。
莉子　はい。(選ぶ)これです。
あいか　(カードを見て)あ、そう・・・ですか・・・(莉子に)あのですね・・・今、お付き合いしている方がいらっしゃいますね？

莉子　いますいます。もう付き合って一年なんですけど・・・その人との間に何かあります？
あいか　どうしましょう・・・これ言っていいかしら？
莉子　どうぞ言ってください。
あいか　今後、浮気するんですね。
莉子　エ？　蒼君が？　えー、全然そんなふうな感じしないんだけど。やっぱり男だから？　でもカッコいいからか～。ヤダ～、ちょっとショックだわ～。
あいか　違います。あなたがです。
莉子　へ？
あいか　あなたがまた別の男の人と知り合って、その人がすごくいい人なんですね。それで・・・まぁ・・・・そういうことになります。
莉子　私が？　あの・・・今、そういう私の周りにそういう感じ、無いんですけど。
あいか　今はね。これからの話。
莉子　あ、でも・・・浮気しないって運気にもできるんですよね？　毎日、黄色いハンカチを買って家の前にぶら下げるとかで・・・
あいか　(カードを見ながら)あー・・・あなた・・・天性の浮気性だわ。
莉子　そんなのあるんですか？
あいか　あるんです。
莉子　あの、じゃあ、その・・今付き合ってる人と、結婚とかってどうなんでしょう？
あいか　(カードめくって)うーん・・・・
莉子　・・・・ダメ？
あいか　浮気するから・・・・
莉子　まだしてないんですけど。
あいか　今はまだね。ってだけ。
莉子　あー・・・・(テンションだだ堕ち)・
あいか　でもね、浮気って、モテる人じゃないと出来ないから。すごくドキドキするし、楽しいわよ。

麻紀　先生、ちょっとフォローになってないみたいですよ。
あいか　そうですか？
莉子　（気を取り直して）あ！　自分で浮気しないように気を付ければいいんですものね。占いってそういうものですよね？
「今日は人間関係に気を付けて」とかって。
麻紀　そうそう。自分がしっかりしていれば、大丈夫ですものね。今、カレシさんとお幸せなんですものね。
莉子　えー。幸せすぎて幸せすぎて困っちゃうくらいです。
麻紀　じゃあ、安心よね～。
あいか　（ふふふと笑う）
莉子　先生・・・どうしたんですか？
あいか　いえ。ちょっとね～。気を付けてどうにかなるってレベルの浮気性じゃないんですよね～。
莉子　・・・・
あいか　あ、でも安心して。そういう人がイイって男の人も中にはいるから。
莉子　はあ。・・・・・・あ、そうだ。うちの猫がちょっといなくなっちゃったんで、チラシを渡しに来たんです。（チラシを渡す。も、動揺か封筒を落とす）あ、すみません。じゃあそろそろ、失礼します。（立ち上がる）
麻紀　あら、お茶も出さずにすみません。（見送ろうと立ち上がる）
莉子　いえいえ。もうここで大丈夫ですのでホント。（また封筒を落とす）すみませんすみません！それでは、お邪魔しました。
（逃げるように上手に去る）

間。
そんな中、カードを整理しているあいか。

結那　・・・・結構ショックだったみたい。
麻紀　大丈夫かしら？（チラシをちゃんと見て）いなくなったのって、この猫か。

結那　（チラシをのぞいて）あ、この猫・・・・ホラ、この前そこの庭を通った、不細工なシマシマ猫。
麻紀　そうなの？　あホントだ。じゃあ、お隣さんに教えてあげなきゃ。猫ちゃんいなくなって探してるんだろうし。
あいか　あの、私はもうそろそろよろしいでしょうか？
麻紀　先生、すみません。まだ全然お話を聞けてないので、もう少しよろしいですか？
あいか　そうですか。じゃあ（腕時計を見て）あと三十分くらいなら・・・
麻紀　すみません。（結那に）じゃあさ、結那、あなた、お隣さんに行って、猫の事伝えてきてよ。うちの庭通ったの見ましたよって。
結那　えー？私が行くの？
麻紀　タダでここに住んでるんだから、それぐらいやる！
結那　はいはい。

結那、嫌そうに立ち上がって、上手に消える。

麻紀　じゃあ先生、また違う質問させてもらいますけど・・占い師さんって、自分で自分の事を占ったりできるんですか？
あいか　あー、それはとても難しい問題なんですよね。そもそも占いというものは・・・・

溶暗

第五幕

麻紀、観葉植物を持って退場。あいか、退場。
吉井、上手前の椅子に座る。蒼、下手前の椅子に座る。前幕の翌日の夕方である。

吉井　・・・・・・

蒼　・・・・・・

吉井　えーっと、なんで・・・・君しかいないのかなぁ？

蒼　それがですね、聞いてくださいよ吉井さん。莉子ちゃんが、「お父さんビールとか一緒に飲むと急に仲良くなるタイプだよ。最初に挨拶来た時も、ビール飲めなくって残念だったみたいだし」って言うんで、ビールを段ボールで買って持ってきたんですよ。なのに、ココ来たら、カノジョが「職場でトラブルがあったから今すぐ行かなきゃいけなくなった」って。ウワーマジ俺お父さんと二人っきりかよとか思ったら、「お父さん、吉二郎いなくて寂しすぎて猫カフェに行ったの。だからたぶんしばらく帰ってこないから大丈夫。じゃあ一時間くらいで帰ってくるから、あとよろしく！」ってダーって出てっちゃって。それで、オレ鍵閉められないから帰るわけいかないじゃないですか。だからそのまま・・・そしたら、ピンポンって吉井さん来たんで出たんです。

吉井　・・・・僕は吉二郎ちゃん探しの経過報告に来ただけなんだけどね。

蒼　あ、見つかったんですか？　吉二郎ちゃん。

吉井　見つかったら連れてきますよ。一週間捜索しているけど、いまだに手掛かりなし。

蒼　そうっスか。早く吉二郎君見つかってほしいな。そうしてくれないと、お父さんの機嫌が悪いままなんで・・・あ、すみません。なんか、お茶とか出しましょうか？（立ち上がる）

吉井　いや、いい！・・・って言うよりも、君の今のこの状況で、家族みたいにお茶を出さない方がいいと思うよ。

蒼　はあ。（座る）

吉井　でも・・・大変そうだねぇ。お父さんに気に入られるの。

蒼　そうですね。ただよろしくお願いしますって挨拶したいだけなのになぁ。吉井さんって、結婚とかしてるんですか？

吉井　残念ながらしてませんよ。気楽な独り者です。

蒼　そっかぁ。結婚してたら、相手のお父さんと仲良くなるコツとか聞けるかなと思ったんですけど・・・

吉井　（苦笑い）ご期待に沿えなくて申し訳ありませんね。

蒼　（気づかず）いえいえ。挨拶しようと思うと猫がいなくなったりお父さんがいなくなったりで、なんかタイミング悪いっていうか、

吉井　運が悪いのかなぁオレ・・・
（呟く）運だけじゃないと思うけどね。
蒼　なんです？
吉井　いや別に。僕もさ、昔付き合ってた人のお父さんにすごく嫌われた事あるから、わかる所もあるよ。まあ、君塚さんはそこまで君の事嫌ってないからさ。大丈夫だよ。
蒼　でもなぁ、あのくらいの年の人との距離の縮め方が分からないっていうか・・・ア。
吉井　どうした？
蒼　吉井さん、お父さんと年齢近いですよね？
吉井　マ、あんまり離れてないかなと思うけど。
蒼　じゃあ、ちょっとお父さん役やってみてください。
吉井　え？
蒼　だから、吉井さんがお父さん役やって、僕が僕やって、なんか、こうした方が気に入られるんじゃないかとか気づいた所あったら、アドバイスしてください。
吉井　えー？でも、どうかな・・・君塚さんと僕だと・・・性格とかタイプ的にちょっと・・・
蒼　まぁちょっとやってみましょうよ。じゃあ、こっちに座ってください。（下手の椅子に座らす）僕がこっちで。（上手椅子に座る）じゃあ行きますよ。（改まって）こんにちは。
吉井　あ、ああ。いらっしゃい。
蒼　なんか違うな～。もうちょっとお父さんっぽくできませんか？　なんかこう、もうちょっとバッサリ言われるというか・・・
吉井　あ、そう。わかった、がんばりますよ。
蒼　頑張ってくださいよ。じゃもう一回。こんにちは。
吉井　（陽一っぽく）また来たのかい？
蒼　そう、そんな感じです。いいじゃないですか。続けますよ。まあそんなこと言わないでください。あのですね、僕、今日、お父さんがお好きなんじゃないかと思って、ビールを買ってきました。よろしかったらどうぞ。

吉井　ビール？　そうかい？　なんだか悪いね。重いのに。
蒼　イエ大丈夫です。元サッカー部だったので、体力には自信があります。
吉井　ほう。サッカーやってたのか。ポジションはどこ？
蒼　右のサイドバックです。
吉井　サイドバックだったのか。じゃあ、結構運動量の必要なポジションだね？
蒼　はい。でも僕の場合、チャンスになると調子乗って上がりすぎちゃう事多くて、キーパーに「早く戻れよ」ってよく怒鳴られてました。
吉井　ハハハ。それはキーパーも困るよね。最終ラインが中途半端になっちゃって。
蒼　そうなんです。監督にも「お前は最終ラインをすぐ忘れる」ってよく怒られてました。
吉井　それだけ真っ直ぐな性格って事だよね？　まぁ、男は多少不器用でも、真っ直ぐな方がいいからなぁ。
蒼　オ。お父さん、なんか、歌の歌詞みたいですね。
吉井　そうか？　♪男は多少不器用でーもー
吉井と蒼　♪真っ直ぐな方がいぃーいぃー。　（二人、笑う）
吉井　（肩を叩いて）いいじゃない！　それだけできれば大丈夫そうだよ。
蒼　いやぁー、なんか、意外と、うまくいっちゃったなぁ。
吉井　でもさ、一個だけ注意するとしたらなぁ・・・一番最初に「今さらになりますが、正式にご挨拶させてもらおうと思いまして伺いました。娘さんとお付き合いさせてもらっています蒼です。よろしくお願いいたします」って言っておいた方がいいよ。そうすれば、君塚さんも、「こう見えて意外と謙虚な男なんだな」って思って、君の印象もアップするよ。
蒼　そうですか。「謙虚」か。「ケンキョ」っスね！
吉井　そう。どんな気難しいおじさんも、謙虚な若者には弱い。
蒼　よーし、謙虚謙虚！　目指せ！謙虚率アーップ！
吉井　なんか・・・警察みたいだね。検挙率アップって。
蒼　そうでしたね。言ってみて、僕もそうだなとか思っちゃってました・・・

溶暗

第六幕

吉井、蒼、去る。

結那、観葉植物を持って下手に置いて、上手前椅子に座り、手を組みながら真剣な眼差しでテレビを見ている。

下手から、肩を揉みながら麻紀が入ってくる。前幕から六日後の午後である。

結那　・・・また書いてたの？

麻紀　そ。で、また止まっちゃった。

結那　また？　今度は、どんなトコで？

麻紀　うーん・・・何って言ったらいいかなぁ・・・・手っ取り早く言うと・・・（小さい声で）キスシーン。

結那　え？

麻紀　（はっきりと）キスシーン。若旦那と早紀が初めてキスする所書いてるんだけど、なんかありきたりの場面しか浮かばなくって。

結那　へー。でもさ、キスくらい簡単に書けそうに思うけど。二人きりにして、ブチューって。

麻紀　いい？　読者は、ページをめくりながら「こうなるだろうな」って予測しながら読んでるのよ。その予測の斜め上をいかないと、あっという間に「つまんない」って烙印押されちゃうのよ。

結那　そんなもんなんだ。

麻紀　そう。こう見えて大変なんだから。（何かに気づいて）そう言えば、ちょっと結那に聞きたいんだけど・・・最近の若いコの恋愛の「一番の盛り上がり地点」って、どこ？

結那　え？　言ってる意味がよく分からない。
麻紀　だから、恋愛映画やドラマ見るでしょう。それで、「キュンキュン」って感じるのって、どこのレベル？　キス？　手をつなぐ？　告白？　それとももっとハードな親密になったら？　あ、壁ドンだ、壁ドン。よく聞くものね。壁ドン。
結那　壁ドンはちょっと違うけどね。
麻紀　そうなの？　じゃあ、どこになるの？
結那　う～ん・・・やっぱり・・・・キス？・・・・いやぁ・・・どうかなぁ・・・・
麻紀　あー、ごめん。あんまりそっちの経験ないから分からないか。
結那　そんなことないって。埼玉にいた頃は、結構・・・モテたりした時もあったんだから。でも、本当難しいよね～。
　　やっぱ・・・「好きです」「私も好き」ってお互いの気持ちを告白する瞬間？
麻紀　へー・・・時代が変わっても、そこはあんま変わらないのかな？
結那　あー、でも・・・ラインとかサイトとかゲームとかで知り合って、それで明日初めて会うとかだと、その会った瞬間がめっちゃ盛り上がりドキ？
麻紀　なるほどねー。会わずにコミュニケーションできるツールが増えたからこそ、直接会ったってだけで一番テンション上がる、のが今っぽいのかしら。
結那　そういえば今ちょっと思ったんだけどさ。
麻紀　何？
結那　「日本は少子高齢化」ってテレビでよく言ってるでしょ？　あれってなんで「少子高齢化」になっちゃったの？
麻紀　ああ・・・それ。それってさ、実はね、私とか結那のお母さんの世代が原因だったんだよね～。
結那　え？　そうなの？
麻紀　うん。あのね、第二次世界大戦って学校で習ったでしょう？　戦争終わって平和になって、戦地に行った人達も帰ってきて、バーっと生まれる赤ん坊が増えたのが第一次ベビーブーム。その第一次の人たちが結婚適齢期になってまたバンバン赤ちゃんが生まれたのが第二次ベビーブーム。ところがそこからバブルが弾けて景気が悪くなったり、結婚して子供を産むだけが女の生き方じゃないぞみたいな考えが出たりしてきて、ついに第三次ベビーブームは来ませんでした。だから、当然のように少子高齢化になりま

した。というわけさ。
結那　ふーん。
麻紀　まぁ、かく言う私が結婚も出産もしなかったんだから、少子化には貢献しちゃってるけどね。
結那　けどまだチャンスあるでしょう？　結婚。
麻紀　エ？・・・そぉんな、何言ってんの？　無理に決まってるでしょう！　こんなおばさんになっちゃってるんだから。
結那　そお？　おばさんさ、私が言うのもアレだけど、うちのお母さんよりもきれいなんだから、全然まだチャンスあると思うけどな。
麻紀　・・・・そ、そうなのかなぁ・・・
結那　絶対そうだって。だから自信持ちなよ。
麻紀　（まんざらでもない感じで）そうかしらねぇ・・・まぁ私も食事会とか行くと、編集さんとかに結構・・・

ピンポンが鳴る。

麻紀　全くもーう！（インターフォンに出る）はい。・・・・あ、お隣の？・・・・はい・・・・はい・・・・ペット探偵？そうですか。それで・・・はー、そうなんですか・・・・いえいえ、構いませんけど。でしたら、少々お待ちください。（切る）
結那　誰？
麻紀　お隣の君塚さん。ホラ、猫がいなくなった。　なんかね、その猫を探してるペットの探偵さんが、猫が通ったうちの庭を見せて欲しいんですって。
結那　え？　じゃあ、ここにあがって来るの？
麻紀　だってしょうがないじゃない。ここから庭を見せないと。
結那　もーう。（リモコンを押す）
麻紀　あら、別に観てていいのに。
結那　人んチのリビングにあがって、若い女がアニメ観てたら引くでしょう？
麻紀　そんなもん？

結那　　そんなもんよ。

麻紀、上手に消える。

少しの間の後、上手から、麻紀に連れられ、陽一、吉井が入ってくる。

陽一　　あ、こんにちは～。

吉井　　失礼します。

陽一　　娘さんですか？

麻紀　　娘じゃなくて、姪です。姉の子供なんです。ちょっと最近一緒に住んでいて。

結那　　ども。

吉井　　猫ちゃんが通ったのって、あの窓の庭ですか？（指さす）

麻紀　　そうです。あそこをこう来て（指で指し示す）それでまたそっちの方に向かって行っちゃいました。

吉井　　そうですか・・・ちょっと、失礼します。（前に出て、庭を真剣に観察している）

陽一　　（吉井に近づいて）吉井さん、どうですか？

吉井　　今ちょっと、吉二郎ちゃんの気持ちになって考えてみますので、少しお待ちください。うーん・・・いい天気だなぁ、次は、こっちの方に行ってみようかニャン・・・・

麻紀　　あの・・・君塚さん。ちょっとよろしいですか？

陽一　　はい、何でしょうか？

麻紀　　猫を飼ってらっしゃるんですよね？

陽一　　あ、そうです。吉二郎って名前でして、もうやんちゃでやんちゃで。とか思ったら、おやつのチャオチュールを見た時の「早くくれよー」って顔が何とも言えない可愛さでして。あ、写真があるんですけど・・・

麻紀　　こんな事言うのもアレなんですけど、このマンション、ペットを飼うのは禁止という規則があるのは、ご存じですか？

陽一　　ア。・・・そう・・・です・・・ね。知って・・・ます。

麻紀　ご存じなのにその規則を破って、猫ちゃん飼ってらっしゃるんですか？
陽一　そぉ・・・です・・・ね。そうなります・・・ね。
麻紀　「ペットについて、近隣とのトラブルになった際は、規則を破った方がこのマンションからの退去を求められる場合もある」って書かれているのは知ってますか？
陽一　いやでも、そんなトラブルにはなってないんじゃないでしょうか？
麻紀　今のこの状況、十分トラブルだと思いますけど？　女二人の部屋に男二人でやってきて猫の通った道を見せて欲しいだなんて。正直言わしてもらいますと、すごい迷惑なんですけど。
吉井　あのー・・・もうお庭の方は大丈夫ですので、そろそろ失礼を・・・ね？　君塚さん。（陽一の手を引く）
陽一　吉井さんすみません。ちょっと待っててください。（手をほどき、怖い顔で麻紀に近寄る）
麻紀　な、なんですか？
陽一　・・・・あの・・・・ここの規則を破ってしまった事に関しては、誠に申し訳ございません！またこうやってお宅にお邪魔してしまったことも申し訳ありません。（深く頭を下げる）ただ・・・・その上で大変あつかましいお願いではございますが・・・見逃して・・・いただけないでしょうか？
麻紀　はい？
陽一　あの・・・二年前ですね、私が帰る途中で、何か変な鳴き声がするなと思ったら、弱ってる子猫が段ボールに入ってまして、慌てて家に連れて帰って獣医さんに見せたら、状態が悪くてあと三日もてばいいでしょうって言われて。それから三日間、私は会社を休んで、朝も夜も看病していたんです。そしたらなんでかわからないけどどんどん元気になってって、それから、吉二郎って名前つけて飼いはじめて、吉二郎ってのは、昔の映画に出ていた上田吉次郎って俳優さんからもらったんです。だからあの・・何が言いたいかと言いますと・・・家族なんです、吉二郎は。だから・・・見逃してください。お願いします。（もう一度頭を下げる）
麻紀　・・・・
陽一　こちらに非がありました事は全て認めます。ただ・・・誠に勝手だとは思いますが・・・・離れたくないんです・・・・吉二郎と。
吉井　（陽一の肩を抱きながら）すみません。失礼しますので。

吉井と肩を抱かれた陽一、上手に消える。

結那　・・・・おばさん、あそこまで言う事なかったんじゃない？　あのおじさん、そんな悪い人じゃないと思うけどなぁ。ただその猫がいなくなって心配で、ウチのピンポン押したんだろうし。

麻紀　そうかもね。（一つ息を吐く）ちょっとイライラしてたのかも。

結那　あーあ。あのおじさん、かわいそう。（リモコンをテレビに向けて押し、また観始める）

溶暗

第七幕

結那と麻紀、下がる。結那は観葉植物を持って下がる。

下手前椅子に陽一が座る。莉子と蒼が一緒に出てきて、上手側の椅子に座る。前幕の翌日の午後である。

陽一　・・・で、今日は何の用なの？

蒼　（緊張して）ハイ。今さらで申し訳なくございませんが、莉子さんとお付き合いさせて頂いております、大槻蒼と申す者でございます。ご挨拶させて頂きたいと思いまして、お伺いした次第でございます。

陽一　こちらとしてはさ、いつ挨拶するかするかと思っていたけど、ここに来るの三回目でやっとちゃんと挨拶したね。

蒼　いえ、ここに来るの四度目です。

陽一　そうなの？

莉子　バカ、言わなくていいの！

蒼　いえまぁあの、正式にご挨拶という事でして・・・腰をひくぅくしてやってまいりました。低姿勢で。
陽一　そんなの当然なんだけどね。
蒼　アレ？　おかしいな。
陽一　どしたの？
蒼　いえいえ何でもないです。ア、ビール！　お父さんがお好きだってお聞きしたので、よろしければと思ってビールを箱で持ってきました。
陽一　エ？　君、今日、手ぶらじゃなかった？
蒼　今日は手ぶらなんです。でも、この前、お父さんがいらっしゃらなかった日にここに持ってきて・・・
莉子　キッチンの隅っこにあったでしょ？　ビールの箱。あれ、蒼君が持ってきてくれたの。
陽一　アレ君か？　開けて飲もうとしたら莉子がまだ駄目。今度説明するからしか言わないし・・・
蒼　そうです。お父さんに是非と思って。
陽一　ああそれはありがとう。たださ、お土産だけ置いておくってのもどうなの？　これ常識的にさ。家の人が不在だったら、一度持って帰って、また改めて持ってくるものじゃないかな？
蒼　いやあのでも・・・僕、サッカーやってたんで体力には自信あるんです。で・・・右のサイドバックでした！
陽一　ふ～ん・・・・それ、ドコ？
蒼　エ？
陽一　俺さ、野球は好きなんだけど、サッカー観ないからよく分からないんだよね。それドコなの？　なんとかバックって。
蒼　サイドバック・・・です。グラウンドのこっちらへんで、チャンスと見ると駆け上がるポジションなんです。
陽一　（あまり興味なさそうに）へー。よくわかんないけど。
蒼　上がりすぎるとキーパーによく怒られて。でも真っ直ぐなんです。男は多少不器用でも、真っ直ぐな方がいいんです。
陽一　それ、歌の歌詞みたいだね。
蒼　そうです。歌の歌詞・・・あれ？　おかしいな・・・
陽一　さっきからどうしたの？

蒼　いや、僕が言わないといけない・・・

陽一　何を？

蒼　イエイエ。（パニクってくる）ですから、男は多少不器用でも真っ直ぐで、あと謙虚で・・・検挙率アップ。

陽一　警察？

蒼　♪おとこはー多少ぶきようでーもー

陽一　びっくりした。なんで急に歌うんだよ！

蒼　・・・すみません。

莉子　（我慢の限界で）もうさ、お父さんなんなの！　娘のカレシが挨拶に来てるんだから、もうちょっと優しくしてもいいんじゃないの？

陽一　じゃあ、今のわけわかんない歌、最後まで歌わすのか？

莉子　そうじゃなくて！　何があったか知らないけど、昨日から機嫌悪いしさ！　そんなんだからね、お母さんと離婚して、いつまで経っても独りなんだよ！

陽一　なんでお父さんそんな事まで言われなきゃいけないの！　今日ってただ挨拶受けるだけだろう？

莉子　もういいよ！　蒼君、行こう！　こんな人じゃ話になんない。

蒼　あ、ああ。（莉子に引っ張られながら去る。また慌てて戻ってきて）お父さん、ビールは飲んで大丈夫です～。（また引っ張られる）

蒼が消えたあと、陽一、大きくため息を一つつく。

陽一　（頭をクシャクシャとかきむしって）アー・・・バカだな。全くもう・・・

インターフォンが鳴る。陽一、インターホンに出る。

陽一　はい。あ、どうもー。

陽一、上手に消え、吉井を伴って戻って来る。陽一、吉井に上手前の椅子を進めて、自分は下手前の椅子に座る。

陽一　今日は、どうしたんですか？
吉井　いや。ちょっと近くを通ったのと、昨日の事が気になっちゃいましてね。ほら、お隣さんのあれです。規則を破ったとか。
陽一　ああ。
吉井　どうです？　お隣さんから何か？
陽一　何もないですよ。
吉井　そうですか。じゃあ良かったです。僕が原因だと思うと、ちょっと心苦しくて。
陽一　吉井さんはそんな事気にしないでいいんですよ。私がいけないんですから。
吉井　いえ・・・あ、娘さん、さっきすれ違いましたよ。なんか、声掛けられる雰囲気じゃなかったんですけど。
陽一　ああ・・・そうですか。今、ちょっと親子でやっちゃって（左右の人差し指をぶつける）
吉井　ケンカですか？
陽一　はい。なんか・・・昨日お隣での事があってから、ちょっとむしゃくしゃしてまして。で、今日、カレシのほうが挨拶に来てくれたんですけど、その気分のまんま話しちゃったんです。そしたら娘が怒り出して・・・
吉井　君塚さん、結構いろいろ言われて、頭下げましたものね。
陽一　ええ。面倒ですね。この「プライド」ってやつは。年取るごとに無駄に大きくなって。これは・・・何なんでしょね？
吉井　なんだかわかりますよ。私も、年々、自分は素直になれなくなってきたなぁって感じてきてます。
陽一　吉井さん、ご結婚とかは？
吉井　その直前までいった人はいます。でも無理でした。僕に、何かが足りなかったんでしょうね。
陽一　いやいや。私だって足りないものだらけですよ。だから結婚してもまた独りになってるし。
吉井　前の奥さんは、今は？
陽一　十年以上前に離婚して、今は別の男と暮らしてます。まだ小学生だった娘は私が引き取りました。

吉井　そうだったんですか。
陽一　シングルファーザーで、いろいろありながらやってきて、大人になったなと思ったら、カレシが出来たから紹介したい・・・男親なんてつまんないもんですね。息子だと男同志でろくに喋んないだろうし、娘だと他の男に盗られてしまうし。
吉井　親になっただけでも良かったじゃないですか。僕なんて、親にもなれてないんですから。
陽一　自分の娘って言っても、なかなか・・・・思った通りにやってくれないものですよね。
吉井　仕方がないですよ。親子って言っても、違う人間なんですから。
陽一　ですよね。
吉井　僕も、いつも思い通りにならないものばっかり相手にしてますからね。
陽一　（笑って）娘と猫を一緒にしないでくださいよ。
吉井　あ、すみません。（笑う）

寂しい笑いの中、溶暗

第八幕

陽一と吉井、消える。
結那が観葉植物を持って出てくる。所定の位置に鉢を置いて、下手前の椅子に座る。前幕から四日後の夜である。
結那、両手を組んで、テレビを観ている。集中している。集中集中集中・・・脱力し、終わる。
どうやらエンディングソングらしい。微かに鼻歌で歌っている。

結那　♪かんにんさ・せ・て～。ドゥビドゥビドゥ～ドゥビドゥビドゥ～、バ。ドゥビドゥビドゥ～ドゥビドゥビドゥ～、バ　プリチー！（頭を振って四回節をとった後、振りつけしながら歌う）♪あなたの心を癒すため～　宇宙の果てでもひとっ飛び～　待ってて待ってて～　あなたに捧げたい～　（上手から麻紀が帰ってくるが歌う結那をあっけに取られて眺める）忍びの修業は辛いけどーあなたがいるから頑張れる～　♪キュートでショートな　宇宙最強～お～～　（サビで気分があがり立ち上がる）♪私の武器はまきびし　かぎなわ　くさりがま！　まきびし　かぎなわ　くさりがま！そしてトドメの！　きらめく笑顔～！　♪あ、あ～　スペース忍者ぁ～～　し・の・びーん　しのびん！（決めのポーズをした所で麻紀と目が合う）

麻紀　あ・・・

結那　・・・ウッソ！なんでノックしないの？　普通ノックするでしょう？　おばさんサイテー！　ヒドイ！　サイアク！　（怒りながら下手に消えてしまう）

麻紀　・・・・ノック？　ここアタシんちで、しかもリビングなんだけど・・・・

溶暗

第九幕

麻紀、消える。

莉子、スケッチブックを持って下手前の椅子に座る。

結那、スケッチブックを持って上手前の椅子に座る。前幕から二日後の午前である。

この場では、絵を書きながら喋る。

結那　急に来たからビックリしましたよ。
莉子　ゴメンね。休みなんだけど、ちょっと家にいたくなくてさ。
結那　別にいいんですけど。私も暇だし。
莉子　そっか。（テレビを観て）この、テレビでやってるのって、アニメ？
結那　はい。「スペース忍者しのびんの日常」のシーズン３です。
莉子　シーズン３って事は、今、シーズンなにまで出てるの？
結那　今、放送しているのはシーズン４。
莉子　じゃあ、これは、ＤＶＤとか？
結那　シーズン３のＤＶＤセットです。
莉子　結那ちゃんの？
結那　そうです。シーズン１も２も持っていて、１は、数量限定のしのびんフィギュアがついていたんです。
莉子　へー・・・すごいね。どのシーズンが一番面白いの
結那　うーん・・・私としては、やっぱりシーズン１が一番なんですよね。第八話で、「くのこ」と「いちこ」が相棒になった瞬間は、マジ熱くなったし、第二十一話でしのびんの出生の秘密が明かされた時とかは、涙腺ウルウルでしたね～。
莉子　（分かるような分からないような）あー、そうなんだ・・・・
結那　あ、今出てるじゃないですか。あの、しのびんの師匠の「天元斎」
莉子　あ、あの、紺色の、渋い感じの忍者？
結那　そうです。あの「天元斎」の声の人が好きなんですよ。良くないですか？　渋めだけど、そんなに年取っても無い感じで。
莉子　そうね・・・確かに、いい声だよね。
結那　ですよね？
莉子　アレでもちょっと待って。この声、私、聞いた事・・・ある？（目を瞑って）・・・うん。確かに、どっかでよく聞いた。
　　この声優さん、なんて名前？
結那　友原健治です。

莉子　ともはら・・・けんじ・・・ともはら・・・けん・・・じ・・・
結那　知ってますか？
莉子　ともはらけん・・・ともけ・・・ア！「ともけんのワイワイラジオ！」そっか、これワイワイラジオの人か！
結那　なんですそれ？
莉子　ＦＭでやってるラジオの番組。私もラジオとか聞く人じゃなかったんだけど、カレシが好きでよく聞いててさ。「ワイワイラジオ」もカレシから勧められて聞き始めたんだよね。そっかー。なーんか聞いた事ある声だと思ったら、「ともけん」の声だったんだ～。
結那　それ、何時からやってるラジオなんです？
莉子　木曜の夜十時。なんかさ、面白い事ばっかり言ってる「ともけん」が、時々、人生におけるいい一言を言ったりするんだよ。私はそれが好きで結構聞いてるかなぁ。
結那　ふーん・・・じゃあ今度聞いてみよう。あ、なんか、私のアニメの事ばっか喋って、つまんないですよね。すみません。
莉子　いやいや、そんな事無いよ。結那ちゃんの話聞いてると、私も、この「しのびん」最初からちゃんと観てみよっかなぁ～とか思った。あ、これって、社交辞令とかでとりあえず言ってるんじゃなくて、ホントにそう思ったから。ホントのホントに本当だから。信じて！　ね！　あぁ・・・気持ちを伝えたいけど・・・伝えきれてないのってもどかしいね。
結那　じゃあ・・・シーズン１のボックス、貸しましょうか？
莉子　うん、貸して！　てか、私から言いたい。貸してくれる？
結那　・・・分かりました。じゃあ、あとで渡します。
莉子　ありがと！
結那　いえ・・・私、地元で、友達とかに「しのびん」の話してると、「わかんね」って引かれてばっかりだったんです。いない所で「マニア」とか「キモイ」とか言われて。
莉子　へー、そうなんだ・・・
結那　まぁ私、変な子ですから、当然なんですよ。
莉子　・・・・でもさ、結那ちゃんは、今もまだ「しのびん」が好きって事は、その友達よりも「しのびん」が好きだったんだよね？
結那　ええ・・・はい。

莉子　じゃあ、私から言わせてもらうとさ、そのお友達って奴らが、結那ちゃんにとって大した価値のない奴らだったんじゃない？
結那　（莉子を凝視する）・・・・・・
莉子　・・・・・アレ？　どうしちゃったの？
結那　・・・すみません。あまりにもバッサリした意見だったんで、驚いちゃって。
莉子　え？　そうだった？　ゴメン。
結那　イエ私に謝られても。
莉子　そうだよね。
結那　（我慢できなくて笑いだす）
莉子　ちょっと、なんで笑うのよ？
結那　（笑いながら）すみません。バッサリ切ったと思ったら、すぐに謝って、おかしくて・・・
莉子　そっか・・・でさ、ゴメン、ちょっと聞いていい？
結那　はい？
莉子　「書いてください」って言われたから書いてるけど、これ、何で絵を書くの？
結那　あ。あの・・・・何もなくて、面と向かってお喋りするのって、何か緊張しませんか？　それよりも、絵でも書いて気を紛らせながら話した方が気が楽なんです。
莉子　あー、なるほどね～。でも、なぜにサンタクロース？　時期も全然違うのに。
結那　サンタって、簡単そうじゃないですか？　おじいさん書いて、ひげで帽子被れば、なんとなくそう見えるかなぁって思って。
莉子　なるほど。
結那　・・・・でも、うらやましいな。莉子さん。
莉子　エ？　なんで？
結那　だって、カレシいて、普通に働いていて、ちゃんとしているみたいじゃないですか。私なんて、カレシいないし無職のプー太郎だし、サイアクですよ。
莉子　そんな事無いよ。

結那　絶対そうですって。あー、私もせめて普通の人と同じような生活できてれば、親とかおばさんが安心するんだろうけどなぁ。
莉子　普通って、そんなにいいものなのかなぁ？・・・私はさ、こういう普通の生き方しか、出来なかったんだよね。もっといろいろ、普通じゃない違ったこととか、笑っちゃうくらい変な事をやれば良かったって自分で思うんだ。
結那　ふーん・・・よくわかんないなぁ。
莉子　どこがわかんないの？
結那　それって、やっぱり普通の事が普通に出来てる人の言い分だと思うんです。あ、あと・・・
莉子　うん？
結那　「出来なかったんだ」とか「やれば良かったって思うんだ」って、過去形なんだけど、もう出来ないみたいな言い方じゃないですか。やろうと思えば、これからだってまだ変な事や違う事いくらでも出来るんじゃないかなぁ・・・
莉子　・・・・うん。そっか。
結那　あ、何か、偉そうでしたね。すみません。
莉子　ううん。でも、それは結那ちゃんにも言えるね。
結那　え？
莉子　「普通の事が出来なかった」って言うけど、普通の事くらい、これからいくらでも出来るよ。私よりも若いんだし。
結那　そう・・・です・・・か。ア、絵、書けました？
莉子　うん。書けたよ。
結那　見せてくださいよ。（もらって、見て笑いながら）へー、なるほど・・・
莉子　ずるい。結那ちゃんのも見せて（スケッチブックを取って見る）あー、これは・・・ねえ。
結那　えー？　そっちの方がアレじゃないですか？
莉子　いやいや。結那ちゃんのも・・・フフフ。
結那　どっちかって言うと、私、勝ってますよ。
莉子　何言ってんの。負けてません～。
結那　じゃあ、二つ、並べてみます？

莉子　いいよ。じゃあ、せーの。でね。
二人　いっせーのー、セ！（客席に見えるように並べる。）
莉子　やっぱ結那ちゃんの方が変だよ～。
結那　ぜーったい、莉子さんの方がヘタですって。

二人が楽しそうに言い合う中、暗転。

第十幕

結那、観葉植物を持って退場。莉子、退場
吉井、下手前の椅子に座る。
莉子、紐でつながったビールの空き缶をガラガラ音させながら入ってきて、上手前の椅子に座る。前幕から翌日の夜である。

莉子　あー、もうムカつく！　大体さ、父親なんだから、いつかこういう日が来ることくらい覚悟しておけばいいじゃないですか？なのに、カレシが来たくらいでウダウダグダグダ・・・（スマホをいじっている吉井に）聞いてる？
吉井　聞いてます聞いてます。仕事の連絡なんで。（独り言のように）吉次郎ちゃん探しの経過報告に来ただけなんだけどなぁ。
莉子　なに？
吉井　何でもないです。でも・・・結構飲んだね？
莉子　うん？　キッチンに段ボール箱でたくさん置いてあったから、それ飲んだの。
吉井　蒼君がお父さんにって買ったヤツじゃないか。

莉子　なんか言った？
吉井　いや別に。
莉子　私だってね、飲みたくて飲んでるわけじゃないんだよ飲みたくて。
吉井　あのー、お父さんは今日？
莉子　知らない。どっか行った。ケンカしたから、また夜遅くにでも帰って来るんじゃないの。
吉井　そうか。今日は報告できないか・・・
莉子　コラペット探偵！　何ボソボソ喋ってるんだ？　全く、お前らおじさん達がしっかりしてないから、私ら世代が大変なんだよ。もっとさ、父親らしくドーンと構えてさ、カレシの一人や二人や三人くらい、受け止めてやるぜみたいにどっしりと出来ないんですかね？
吉井　三人は多いな。
莉子　あん？
吉井　いや・・・まぁさ、お父さんだって、莉子さんの事、いろいろと考えているよ。こないだ二人で話したけど、そんな事言っていたから。
莉子　どうなんでしょうね・・・・（頬杖をついて）ハー、わたしゃもう疲れたよ。うん。疲れた。
吉井　大変だねぇ。
莉子　あー、実の親って言ってもなかなか・・・こっちの思うようにやってくれないものなんだよな～。
吉井　仕方がないじゃない。親子っていっても、それぞれ別の人間なんだから。
莉子　・・・・そんなもんか。
吉井　・・・・そんなもんだよ。
莉子　あー、めんどくさいなぁ。
吉井　そうだねえ・・・（耐え切れずに笑う）
莉子　どうした？　ペット探偵。
吉井　いや・・・・親子だなぁと思って。

莉子　何言ってんだ！　私らは親子で当たり前だろう！
吉井　そうだね、ごめんごめん。でもさ・・・僕からすると、ちょっとうらやましいよ。
莉子　何が？
吉井　独り身だと、娘との親子喧嘩もできないからね。
莉子　まあね、親子ですから。わたしたひ。
吉井　お父さん、彼のことそんなに嫌いじゃないんだと思うよ。
莉子　（睨む。イスの上を歩いて吉井に近寄る）
吉井　え？　怒った？
莉子　よし、ペット探！　話が分かる！（吉井の背中をバンバン叩く）
吉井　痛いって。
莉子　そう言えばさ、なんでペット探偵なんかやってんの？　あんまり、ペット探偵になりたいなんて聞かないよね？
吉井　あ、そこ聞く？
莉子　あん（頷く）
吉井　あのさ、最初はね、普通の探偵になりたかったんだよ。マンガで探偵って職業を知って、それで憧れてね。
莉子　あ、あれでしょ？（コナンのテーマを口ずさむ。吉井も後から追って口ずさむ）　見た目は子供、頭脳は子供！
吉井　それ普通の子供だね。
莉子　いちいちうるさいなぁ。それで？
吉井　探偵事務所で修行していたんだけど、なんでかヘマばっかりしてね。尾行すればすぐに気づかれてまかれちゃうし、せっかく撮った証拠写真のデータを消去しちゃったり・・・探偵の素質なんか無いってさんざん言われてね。
莉子　へー。
吉井　ある時さ、猫を探してほしいって依頼があって、面倒な仕事だからって僕に回されてね。そしたら、次の日にはもう見つけて捕まえられたんだよ。
莉子　すごいじゃん。

吉井　飼い主さんが、ありがとうありがとうって涙流して感謝してくれてさ。それから、ペット探しの依頼があったら全部僕の担当になったんだけど、浮気調査とかと比べたら金にならなくてね。事務所の同僚からは、ペットと遊んでるだけだってバカにされたんだ。これだって大事な仕事なんだ。あんなに喜んでくれる人がいるんだ。って悔しくてね。その事務所辞めて、独立して・・・・

（莉子を見て）あれ？寝てる？

莉子　寝てないよ。聞いてた聞いてた。いろいろ大変だったんだな探偵。飲め。

吉井　く・る・ま・な・の！

莉子　私ばっかり飲んで不公平だろう。いいから飲め！　全部蒼君が買ってきたのだから、遠慮いらないから。

吉井　知ってて飲んでんのか。

莉子　なに？

吉井　いや何でもないです。

溶暗

第十一幕

吉井、莉子、消える。

麻紀、観葉植物を持って入ってくる。前幕から三日後の夜である。

明るくなると、麻紀が紙片を持ってイライラしながら電話をかけている。

麻紀　　ダメだ。電源入ってないわ。

麻紀、それでもまた電話をかける。
インターフォンが鳴る。

麻紀　（インターフォンに出て）あ、すみません。今開けます。

麻紀、上手に消える。すぐに、麻紀、続いて莉子が入ってくる。

麻紀　すみません突然。
莉子　いえ。私も着信に気づかないですみません。それより、結那ちゃんは？
麻紀　部屋にこれが置いてあって。（紙片を渡す）
莉子　（読む）「みんな　さようなら」
麻紀　私、朝から用事で外出てて、帰ってきたらいなかったの。埼玉の家に帰ったのかと思って、姉に連絡したら帰ってないって。
莉子　じゃあ、どこ行ったんですか？
麻紀　それがわからないのよ。あのコこっちに友達いないし。携帯に何度かけても電源切れてるし。莉子さん、あのコと仲良くしてたでしょう？　だから、何か知ってるかなと思って。
莉子　知らないです。
麻紀　どこか行きそうな所とかは？
莉子　・・・全然。
麻紀　じゃあ・・・どこ行ったのかしら？
莉子　（紙片を）これって・・・どういう意味・・・でしょう・・・
麻紀　・・・あのコ、最近、元気なくて、ちょっと落ち込んでたふうだったの。
莉子　エ、じゃあ・・・・
麻紀　・・・・・

莉子　まさか・・・・

麻紀　違うの。そういうあれじゃないと思うのよ。絶対。ただ、ちょっと・・・・

莉子　とにかく・・・探しましょうよ結那ちゃん。近くにいるかもしれないから。

麻紀　ただどこ探せばいいのかも私分からないの。やっぱり、警察に行くとか・・・

莉子　でも・・・二十歳過ぎた女の子が半日帰ってこないくらいじゃ、むりですよ。

麻紀　・・・そうよね。

莉子　何かないか・・・どこか・・・人探し・・・人探す・・・・あ。

麻紀　何？

莉子　いえ。なんかちょうどいいものがあったみたいな気がして・・・あー、なんかいい事思いついた気がするんだよなぁ～・・・・ゲ。

麻紀　ゲ？

莉子　ゲ・・・ゲ。♪ゲゲゲのげ～

麻紀　なんで今それ歌うの？

莉子　あーもう！　ちょっと静かにしていてください！　ったく・・・・ア！

麻紀　今度はどうしたの？

莉子　気づいちゃったんです。探すのプロの人、私知ってるんです。ちょ、ちょっと待っててください！　（上手の方に行きながら）今連れてきますから。本当、すぐ、すぐ、本当にすぐですので！（上手に消える）

麻紀　え？　莉子さん？　ちょっと・・・

麻紀、なんだか分からない感じで、それでも心配の方が強い表情。また電話をかけようとする。

麻紀　・・・ひょっとして、鬼太郎呼ぶの？

溶暗

第十二幕

前幕から一時間後。ほとんど間が無く明るくなる。
麻紀が指を噛みながらイライラしている。
莉子、吉井の手を引っ張りながら上手から入ってくる。続いて陽一も来る。

莉子　連れてきましたぁ！　この人、探偵なんです。
吉井　あ、どうも。この前はお邪魔しました。
麻紀　いえ。
莉子　なんだ。知ってるんだ。
吉井　ちょっとね。（麻紀に）なんか、よく分からないんですけど・・・とりあえず、今日いなくなったってのは莉子さんから聞きましたので、お話を聞かせてもらってよろしいですか？
麻紀　はい。
吉井　（携帯を出して）まず・・・いなくなったコのお名前は？
麻紀　結那です。菅原結那。
吉井　ユナちゃんですね。じゃあ、性別は・・・
麻紀　女です。
吉井　はいはいわかりました。（スマホに）メス。と。いつからいないんですか？
麻紀　いつからかは分からないんです。朝出かける時はいたんですけど、帰ったらいなくて・・・
吉井　あー、よくあるパターンですね～。えーと、どこから出て行ったか分かりますか？
麻紀　たぶん、玄関です。
吉井　玄関？　開いていたんですか？
麻紀　いえ、自分で開けて。

吉井　ほおー・・・分かりました。じゃあ、ユナちゃんの好きなおやつってなんでしょう？
麻紀　好きかどうか分かりませんけど、よくポッキーを食べてました。
吉井　ポッキー？　結構、偏食なコなんですね。
麻紀　偏食かどうかは分かりませんけど、まぁ栄養バランスとかあんまり気にしないコです。野菜とかもあんまり食べなくて。
吉井　野菜は・・・食べませんよね。
麻紀　エエ。体の為には食べて欲しいんですけど。
吉井　イヤでもやっぱり好きなのは、店で売ってるおやつですよね。
陽一　あの・・・ちょっといいですか？
吉井　はい？
陽一　なんか、微妙に会話が噛み合ってるんですけど、たぶん、中身は食い違ってる気がするんです。
吉井　そうなんですか？
陽一　ハイ。すみません。結那ちゃんのお年は？
麻紀　二十二です。
吉井　あー、結構お年なんですね。
陽一　ハイそこ。ひょっとして、一日中寝ているような猫が頭に浮かんでません？
吉井　そうです。たぶん三毛猫かなぁとか。
陽一　ハイ違いまーす。結那ちゃんは、二十二歳の人間の女の子です。
吉井　えぇ？
莉子　そんな驚く？
吉井　人間ですか？　でも僕、人間は探したけど見つけたことがないので、ちょっと・・・
莉子　え？　そうなの？
吉井　言ったでしょ！　覚えてないの？
莉子　（少しまずいと思いつつ）そうでしたっけ？

麻紀　よくわからないんですけど、結那を探してくれるんですか？　無理なんですか？
莉子　大丈夫です。この人優秀な探偵なので、きっと探し出しますので。
吉井　ちょっと！　莉子さ・・・
莉子　私も協力するから。大丈夫！（麻紀に）すみません。結那ちゃんの写真のデータあったら、送ってもらえませんか？
麻紀　ああ、はい。（慌ててスマホをいじる）
陽一　俺も行った方がいいな。探しに。
莉子　お父さんは、ここで待っていて。連絡来た時の係として。
陽一　ああ、そうか。
莉子　（吉井に）じゃあ、行きましょう！
吉井　はい、わかりました。

莉子、吉井を従えるようにして、上手に消えていく。
陽一と麻紀、改めて目を合わせて、「どうも」と会釈しあう。

溶暗

第十三幕

下手前の椅子に麻紀が、上手前の椅子に陽一が座っている。前幕から二時間後である。

麻紀　（突然スマホの画面を確認する）・・違うか。
陽一　（自分のスマホを確認して）莉子からもないな。心配ですよね。結那ちゃん。お姉さんの娘さんなんですよね？
麻紀　はい。埼玉にいる姉の子なんです・・・内向的だけど言う事はズバッと言うって両極端な性格でして、中学までは良かったんですが、高校に入ってからいじめにあって・・・一時期はすごい落ち込んで、家から一歩も出ないような生活を一年以上していたんです。それで姉夫婦も困っていたので、私が結那に、こっちに出てきて一緒に住むか聞いてみたら、思った以上に乗ってきて・・・
陽一　そうだったんですか・・・でも、結那ちゃんも良かったですね。近くに、心配して声をかけてくれる人がいて。
麻紀　でも・・・こっちでもずーっと家にいて、あの子の為になったのかしらって時々思います。
陽一　まだこれからじゃないですか。
麻紀　エ？
陽一　結那ちゃんの人生。まだこれからですよ。二十前半なんて、まだ、人生のゲームが始まったばかりです。最初で躓いたくらいで全然・・・勝負はまだまだこれからじゃないですか。あ、結那ちゃんがいなくなって心配な時にこんな話し、ちょっとあれですね。すみません。
麻紀　いえ。こんな時だからこそ、関係ない話しをしていた方が、気が紛れます。・・・・でも、本当ありがとうございます。さっきの人生始まったばかりって話です。なんか、ちょっと何て言うか、こう・・・ホッとしました。そう、ホッとしたんです。こんな生活していて、この子この先大丈夫かなとか不安だったので・・・
陽一　いやいや。でも・・・日比野さん、すごいですね。結那ちゃんの事をそこまでちゃんと考えて心配していて。私なんか、娘のカレシが来るってだけで嫌になっちゃうし、うちの猫が脱走したのも娘のせいにしちゃうし。あ、猫の事、本当にすみませんでした。（頭を下げる）
麻紀　もういいですよ。さっきもさんざん謝ってもらったじゃないですか。年上の男性に何度も頭を下げてもらうと、逆にこちらが申し訳なくなってしまいます。さっきも言いましたけど、こちらこそ言い過ぎてしまい申し訳ないです。締め切りが近づいていてイライラしていたもので。
陽一　もう本当、さっきも言いましたけどやめてください。悪いのはこっちなんですから。
麻紀　なんか私達、「さっきも言いましたけど」ばっかり言い合ってません？

陽一　そう言えば・・・そうですね。

二人の間に出来た微妙な間。
それを切り裂くかのように、スマホの着信音が響く。

陽一　私のです。(出て)もしもし？　吉井さんですか？・・・・はい・・・・見つかった？(麻紀がホッとする)そうですか。良かった・・・・
え？　吉二郎？　吉二郎が見つかったんですか？・・・・はい・・・・探してたら・・・・たまたま？　良かったぁ～。いやまだ良くはないけど・・・・分かりました。じゃあ待ってますんで。(切って麻紀に)聞いてましたよね・・・すみません。

麻紀　・・・いえ。吉二郎ちゃん、見つかったんですね。良かったです。

陽一　でも今は結那ちゃんの方を・・・(スマホがまた鳴る)はい。莉子？　どうした？・・・・あー、さっき吉井さんから連絡あったぞ。
ん？・・・・結那ちゃん！　いたの？　どこ？　どこに？・・・・・・・・まんが喫茶？・・・・そんな遠くに・・・ありがとな～。え？　莉子じゃないの？・・・なんでアイツが探してんだ？・・・・・・分かった分かった。とりあえず、気を付けて帰ってきてな。(切る)見つかったそうです。これからここに向かうって。

麻紀　良かったぁ～～～～(大きく深いため息をつく)

陽一　娘の・・・カレシが見つけたそうです。なんでアイツが・・・

麻紀　イエでも・・・その人が探してくれたんですよね。とてもありがたいです。

陽一　ですね・・・まぁ・・・

麻紀　(本当にしみじみと)あー、、良かった・・・・・(ため息を一つつく)

溶暗

第十四幕

陽一と麻紀、何も言わずに座っている。前幕から五十分後である。

ピンポンが鳴る。

麻紀　（インターフォンに出て）はい・・・あ、分かりました。今開けますので。（切る）ペットの探偵さんです。

陽一　吉二郎か・・・

麻紀と陽一、上手に行く。何秒かで戻ってきて、その後ろに吉井がついてくる。

陽一　（キャリーバッグを持ちながら）オ、吉二郎！　吉二郎！（バッグを置いて）どこ行ってたんだよお前！　馬鹿だな～心配させやがって。こんな痩せて・・・ろくなもの食べてなかったんだろう？　家にな、お前のおやつ、いーっぱい買ってあるから、後で食べような・・・・お父さんだぞ、お父さん。な？　どこにいました？

吉井　車で走ってたら、「チラシの猫を見た」って僕の携帯に連絡ありまして。急いでそっちに行ってみたんですよ。そしたらその家の物置の隅っこで、ウーウー唸ってました。

陽一　そうですか。ありがとうございます。

吉井　いえいえ。じゃあすみません。また、結那ちゃんを探しに行ってきます。

陽一　あ、吉井さん。結那ちゃん・・・

麻紀　見つかったんです。莉子ちゃんのカレシさんって人が見つけてくれたみたいです。

吉井　あぁ、そうなんですか。じゃあ、良かったですね～。

麻紀　ええ。ありがとうございます。

吉井　（独り言のように）また人間は見つけられなかったかぁ・・・

麻紀　はい？

吉井　いや、なんでもないんです。
麻紀　あ。

上手に、莉子と結那が立っている。

莉子　ごめんなさい。鍵空いてたから。

麻紀、結那に近寄る。

麻紀　結那！　大丈夫？　どこか・・・ケガとかしてない？　体は？　気分は？
結那　（ムスッとしたまま）大丈夫。
麻紀　あー、もう良かった！（抱きしめる）
結那　・・・・・
陽一　蒼君は？
莉子　ああ。車置きに行っている。
陽一　よく見つけたな。
莉子　蒼君がさ、車で、このへんの漫画喫茶を一軒ずつ全部回ってくれたんだよ。
陽一　へー・・・
麻紀　なんでこんな事したの？　こんな書置きまで置いて。心配するじゃない！
結那　だって・・・私、普通なこと出来ないし。独りぼっちだしさ。別に私なんか、いなくなっちゃってもいいかなぁって・・・
麻紀　（ため息ついて）あのさ、そんな簡単に「独りぼっち」とか「孤独」って使わないでくれる？　結那に本当の孤独ってわかるの？　本当の孤独っていうのはね、「私、孤独なんだ」って言っても、だーれも聞いてくれないって事よ。こんな、私とか莉子さんとかに聞いてもらってるうちはね、まだ独りぼっちじゃないの。

結那　あーもううるさい！　おばさんに私の気持なんかわからないんだよ！　こんな、普通の事が出来ない人間の気持ちなんか！

麻紀　普通普通って、そんなのどうだっていいじゃないの！　結那は結那であって、誰でも無いんだから。そんなね、周りの事ばっかり気にしなくっていいのよ。結那の事を「普通じゃない」って言ってる人たちだって、普通がどういう事かってのを全然分かってない人達ばっかりなんだから。ちょっと自分が優位だと思うと偉そうにアイツはどうしたこうしたあーだこうだって何様のつもりなんだか。人の事よりお前の事どうにかしろよって。そんな奴らがね、結那を見下して偉そうに言える資格なんてないの！

結那　・・・・・（いろいろ思いがあるが、消化しきれなくて目をそらす）

麻紀　・・・・・って偉そうな事言っといて、はーい告白しまーす。私も、周りの人の事ばっか見ていて、自分が周りと比べてどうなのかっていつも考えちゃう人間でーす。やれ結婚しただの子供が産まれただのって話を聞いて、家に帰ってから、ああ私ってそういう普通の女の流れに乗れなかったんだなって凹んじゃうような、そんなつまんない人間でーす。同期にデビューした作家さんがベストセラーなんか出すと、それと比べて自分には作家としての才能が無いだとか文章書いてお金もらう資格が無いだとか考えちゃうような人間でーす。そんなのが偉そうに、説教じみたこと言っちゃダメよね。はい！わたくし、反省しまーす。（ふと周囲を見て）えー・・・じゃあ、そういう事でして、わたくし、ドロンさせていただきます。（指を忍者組みして後ろにさがりながら）ドロン・・・ドロン・・・・ドロン・・・・（部屋から出て行く）

残されたみんな、宙ぶらりんになってしまう。

陽一　あれ？

莉子　エ？

結那　うそ？

吉井　ん？

蒼、上手から入ってくる。

蒼　いやー、すみません。パーキング空いてなくて・・・
莉子　おばさんと会った？
蒼　おばさん？　誰の？
莉子　ここの。日比野さん。
蒼　ああ。その人か知らないけど、速足に歩く女の人とすれちがったよ。
莉子　出てったの？
蒼　うん。
陽一　エ？　じゃあ・・・どういう事？
吉井　たぶん・・・偉そうに言ったと思ったら、急に素直な気持ち言ったりして、気恥ずかしくなっちゃったんじゃないでしょうか？
陽一　でも・・・自分の家だよ。
吉井　いや。僕に言われても・・・・
莉子　アー！
陽一　どうしたんだよ莉子？
莉子　吉二郎だ。吉二郎がいる！
陽一　今さら気づいたのか。

吉二郎の事で盛り上がる陽一、莉子、吉井、蒼。
結那が、その輪にそうっと近づくところで、溶暗

第十五幕

莉子、蒼、吉井、結那、消える。
陽一、下手前の椅子に座る。
あいか、出てきて、上手前の椅子に座る。前幕から四日後の午後である。
陽一、右手の平を見せる。

あいか　（手のひらをじっと見て）はい。ありがとうございます。
陽一　はい。（手を戻す）いやー、でも嬉しいなぁ。まさか、富田あいかさんに占ってもらえるなんて。セクシー占い、好きでよくテレビで見てましたよー。
あいか　（カードを並べながら）ありがとうございます。それでは、この中から好きなカードを選んでください。
陽一　はい。（選ぶ）
あいか　（カードを見てでは、）では、これから順繰りに説明していきますから。
陽一　はい。実は・・・占い師さんにちゃんと見てもらうのって産まれて初めてだから、なんか緊張するな～。
あいか　（驚いた顔で）オオ？
陽一　どうしました？　先生？
あいか　ア・・・ペンギンだ。
陽一　ペンギン？　それって、悪い事のアレなんですか？
あいか　いえ。そうじゃないんですけど。（陽一の顔をまじまじと見て）ああ、ここにいたのね。ペンギン。
陽一　先生、はっきり言ってくださいよ。ペンギンだから・・・アザラシ？　アザラシに注意って事ですか？　エ、それか、シャチ？
あいか　違います。君塚さんの運勢は、おおむね良いんですよ・・・・

麻紀、下手から入ってくる。

麻紀　どうですか？
陽一　すみません。なんか、タダで占ってもらっちゃって。
麻紀　いいんですよ。今日が最後の取材なんですけど、私も結那も占ってもらったんで、この前のお礼も兼ねて君塚さんにどうかなって。
陽一　でも男の私が。莉子にもやってもらうか声かけたんですけど、なんか、私はイイって言ってて。占い好きだったんだけどなぁ。
麻紀　（何か分かる気がして）ああ～、そうですか。
陽一　今日は、結那ちゃんは？
麻紀　しのびんの声優さんのイベントがあるとかで、出かけちゃいました。
陽一　そうですか。じゃあ、元気なんですね。
麻紀　相変わらず、ですけど。（微笑む）
陽一　（微笑む）
あいか　あ、すみません。日々野さん。
麻紀　はい？
あいか　（何かを考えている）・・・・
麻紀　先生？　どうしました？
あいか　イエ。すみません。大丈夫です・・・・そのうち、分かるので。
麻紀　は？

麻紀と陽一が？で目を合わせた中、溶暗

第十六幕

麻紀、観葉植物を持って消える。あすか、陽一、消える。
上手前の椅子に莉子、上手奥の椅子に蒼、下手前の椅子に陽一が座る。前幕から一週間後の午前である。

陽一　なんで当たり前みたいにいるんだよ？
莉子　いいでしょ。結那ちゃん探してくれたりしたんだから。
蒼　まあまあ。親子喧嘩やめましょうよ。
陽一　お前が言うなよ！　なんなんだ全く・・・
蒼　（意に介さずテレビを指して）これ、アニメ？
莉子　そう。
蒼　アニメ見るなんて珍しいね。
莉子　うん。結那ちゃんおススメの、「スペース忍者しのびんの日常」シーズン1。ＤＶＤボックス借りたの。
蒼　へー。
莉子　結構面白いんだよ。蒼君も観てみれば？
蒼　うん。そう言えばお父さん、あれからお隣さんの作家の先生とはどうっスか？
陽一　エ？　なんで？
蒼　いやあの・・・二人で、食事行ったりとかって・・・？
陽一　なぜ？
蒼　ちょっと・・・お二人、いい感じだったなぁ～とか思って・・・
莉子　そうだよ～。日比野さん、いい人じゃない。別に付き合うとかじゃなくてさ、ご飯食べませんかとか誘ってもいいんじゃないの？
陽一　そういうのじゃないよ。

莉子　今はそういうのじゃないかもしれないけどさ、これからどうなるかは・・・ねえ？
蒼　うん。
陽一　いやでも・・・いいよ。
莉子　なんで？　嫌なの？
陽一　そういうわけじゃないけどさ・・・あのな、このくらいの年になると、付き合うとか恋愛とかを始める一歩って、踏み出すのに、すごい勇気とかパワーが必要なんだよ。だから・・・何かきっかけがあったらあれだけどなぁ。
莉子　そっか～。でもさ、お父さん、日比野さんの事は、いい人だなって思ってるんでしょう？
陽一　（返事に困る）
莉子　ん？　どうなのよ？
陽一　・・・・あれ、吉二郎は？　あいつどこ行ったんだ？　しょうがないな～、またどっかで寝てるか。（立ち上がり）きちじろ～。

陽一、下手に消える。

莉子　もーう、またそうやって逃げる。

陽一、走って戻ってくる。

陽一　莉子！　吉二郎どこにもいないぞ！
莉子　おばあちゃんの部屋にいるんじゃないの？
陽一　いないんだ。窓が少しだけ開いてた。こう、猫が通れるくらい。
莉子　エ？　じゃあ、鍵空いてたの？　ひょっとして、また私？
陽一　そう言えば・・・朝、窓開けて・・・そのままだったかな。
莉子　じゃあお父さん？　良かったぁ。また私かと思った。

陽一　それより・・・ひょっとして、吉二郎、また家出しちゃったって事か？
莉子　そうかも・・・・アレ？　ちょっと待って。
陽一　うん？
莉子　確か・・・吉井さんがさ、一度家出した猫は、次に家出した時も、また同じルートを通る確率が高いって言ってたわよね。
蒼　だとすると、吉二郎が行くのは・・・・・
莉子と蒼　お隣さん！
莉子　お父さん、お隣行ってきて！
陽一　エ？おれ？
莉子　この場合そうなるでしょう？　ホラ早く行かなきゃ吉二郎またどこか行っちゃうよ。早く支度して！
蒼　お父さん、がんばってください！
陽一　うるさいよ。

莉子と蒼が陽一を促し、照れ臭い陽一がモジモジしながら支度していく中、ナレーターが入る。

ナレータ　今は昔、幕末の志士、高杉晋作が、句を詠みました。「おもしろき　こともなき世を　おもしろく」面白くない世を面白く生きるんじゃあ！という高杉の性格がよく出た句ですね。それを聞いた高杉と親しい比丘尼が、その句の後に、こんな二の句を付けました。「住みなすものは　心なりけり」そうやって住むのは、心の持ちよう次第なのでしょう。という意味です。人生は、つまらないことの連続です。失敗して上司に怒られてしまったり、いいなと思っていた人には恋人がいたり――。まあそんな人生ですけど、ひとつ、生きてみようではありませんか。明日になったら、また、思ってもいなかったような面白い事があるかもしれません。それでは、ともけん。こと、友原健治が、お送りしました「ともけんのワイワイラジオ」このへんでお時間となりました。ではまた来週。リスナーの皆さんに、幸ありますように――。

ナレーター中に、陽一が下手に入ってジャケットを着てきて、緊張した面持ちで行こうとしている。応援する莉子と蒼。

でもやっぱり行けないという煮え切らない陽一はまた下手に消える。
莉子と蒼が追いかけて、二人が陽一を引っ張って出てくる。が、その手を振り払って陽一は下手に逃げる。
本気モードになった莉子と蒼が目で頷き合って下手に走る。数秒後、嫌がる陽一をなかば引きずるように上手に連れていく二人。
舞台上が無人になると明かりが少し薄暗くなり、一瞬、「終わったかな」と観客に思わせる。
そこで、当たり前のように、観葉植物の鉢を持った結那が出てきて所定の位置に置き、上手前の椅子に座る。
と、明かりが通常に戻る。
両手を組んで、テレビに集中して観ている結那。とても楽しそうである。

結那　　（少し微笑みながらテレビを観ている）・・・・・（何かに気づき）あ、猫。

カットアウトするように照明がふっと消える。
そして、音楽が聞こえてきて、（幕）